
グッド・ネイバーズ 妖精物語

金雀枝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グッド・ネイバーズ 妖精物語

【Nコード】

N4030U

【作者名】

金雀枝

【あらすじ】

高校生霊能力者・不破伊織はとある女性から依頼を受け、妖精界へ行くこととなる。しかし妖精の多くは人間を忌み嫌っており、依頼は予想外にも壮絶な展開に。

妖精たちと接し、徐々に成長していく少年霊能者の界外出張物語。

序章

木々に生い茂る深緑色の葉の隙間から、ギラギラとした太陽が放つ陽光が差し込んでくる。

鬱陶しい程の照りつける日差しも、時々この森で見かける食虫植物たちにとっては恵みの雨ならぬ、恵みの光らしく、いつもより元気なように見えた。

そんな太陽の下、とても幻想的な青色をした腰の辺りまでのロングヘアを揺らす少女と、浅黒い肌が特徴的な少年が森の木々の合間を縫うようにして駆けていた。

「グリフ、遅い！」

少女が自らより数メートル後を走っている少年を一喝する。その張り上げた声音からは余程切羽詰まった状況であることが伺えた。

「そんなこと……言っても、……ラピスが……早過ぎるん……だよ」
グリフと呼ばれた少年、本名グリフィスは息も絶え絶えに泣き言を発する。ちよつとした眩きもやつとの状態だ。

事実、ラピスと呼ばれた少女は不安定な足場を物ともせず、後にいるグリフィスを気にながらも、凄まじい速度でまさに飛ぶようにして走っている。

昨日の夜から既に十時間以上動きまわっているため、ラピスの身体にも十分過ぎるぐらいの疲労が溜まっているのだが、とてもそうは感じさせない。

「無理でも速く走るしかないでしょ」

ラピスもまた息を弾ませつつ、そう言った時のことだった。

黒い稲光が二人の横を通り、そこにあった何本もの木々を破壊的な音とともに薙ぎ倒す。

狙ったのか、倒れた木の内の一部が丁度二人を通行止めするような形で地面に倒れ込んだ。

直後、カツカツというこれ聞こえよがしな歩行音と一緒に、女性

の凜とした声がラピスとグリフィスの耳に届いた。

「やれやれ随分とまあ、ネズミよろしくちょこまかと逃げ回ってくれたな。お蔭で幾分骨が折れたぞ。流石に今度こそ年貢の納め時だらうがな」

ラピスの視線の先には、『綺麗な薔薇には棘がある』という言葉を体現しているかのような、目付きの鋭い険のある美人が悠然と仁王立ちしている。

敵方の騎士の中でも最強と名高い、騎士団長レオノーラ・ハインフエルトだ

その余裕綽々という風の態度は、ラピス達に大きな戦慄を与える。「そっちこそサランダーの領土まで追ってくるなんて、幾らなんでもしつこ過ぎるわよ」

ラピスは苦虫を噛み潰したような表情で言った。

そして件の女性騎士に改めて一瞥を送る。

レオノーラは黒い甲冑でその身を纏っていた。体躯は女性の割には身長が高いものの、甲冑の上からでも細身なのが分かる。とても剣聖の名を与えられた、史上最年少で騎士団を率いる武闘派団長には見えない。

しかし二人は知っていた。このレオノーラがかつて戦場で、百人もの相手と切り結んで命辛々ながらも勝利を収めた、などという信じられない武勇伝を持っていることを。

さらに周囲には十数人の同じく黒を基調とした甲冑を纏うレオノーラの仲間がいる。完全に包囲されていた。

絶望的な状況を前にして、ラピスは全身の汗腺からどっと冷や汗が吹き出すのを感じる。

ラピスは観念したように一瞬目を瞑り長い吐息を吐きだすと、閉じた目を勢いよく見開くと同時に腰元の剣を引き抜いた。

その動作に呼応するかのように、グリフィスもまた無骨な印象を与える巨大な斧を構える

「どうせ逃げられないなら、スプリガン最強のあなたのその首を落

として、少しでも我等が同盟の勝利に貢献してみせるわ」

全身から研ぎ澄まされた刃物のような雰囲気放ちながらラピスは言い放つ。

それに対してレオノーラは愉快そうに口の端を歪めた。ラピスは馬鹿にされているように感じ、少しだけ苛立ちを覚える。

「そう、不愉快そうにするな。実に愉快だ。興味深いと言った方がいいかな。この人数を前にして諦観した様子一つ見せぬか。その意気やよし。敵ながら天晴れだ。こちらも全身全霊で叩き潰してやる」

そう言っレオノーラは、自らのレイピアにしなやかで繊細な指をかけた。

最強の剣士がその獲物に手をかけ戦闘の意思を見せたという事実が、ラピスの身体を更に強張らせる。

時間が平時よりゆっくりと流れる。眼前をひらひらと舞う木の葉の葉脈ですらくつきりと視認することが出来た。それ程に集中している。

瞬き一つせずレオノーラの動きを見極めてやろうと、その黒い甲冑に包まれた華奢な体を凝視していた。

そんな瞬間の出来事だった。

ラピスとレオノーラの交錯した視線を断ち切るかのように、短刀が二人の間を飛び、直ぐそばの木に突き刺さった。

短刀の刃から柄にかけては、見たこともない変わった文様が刻まれている。

ラピス、グリフィス、レオノーラ、その十数人の部下達、この場にいた誰もがその突然飛来した短刀に集中を乱された。

唯一例外がいるとしたら、それは短刀を投げたものだろう。そして、おそらくその者が呪文のようなものを唱える。男の声だった。

「喰らえ、炎の獅子よ。仇なす粗忽者どもを貪り食い、灰塵と成せ」詠唱が終わると、地面からネコ科の大型動物を思わせる　と　いつても思わせるのは形だけで全長五メートルほどはありそう

ような形状に象られた轟々と燃え盛る赤々とした炎が出現するのはほぼ同時だった。

暴れ獅子は戸惑いを見せるスプリガンの騎士達に、一切の容赦なしに突撃する。大量の爆炎と砂塵が舞い上がり、辺りを包み込んだ。獅子が巻き起こした砂塵と煙が晴れると、十数人いたスプリガン達はリーダーのレオノーラを含めて、たった四人しか立っている者はいなかった。

「お、おのれええええ！　そこだあああ！」

流石の騎士団長レオノーラ、視界が明瞭になった瞬間即座に、さらに深い昏迷へと陥る部下達を尻目に、声の聞こえてきた方向にある茂みへレイピアで刺突を繰り返す。

しかし返つてきたのは劍聖の凄まじい劍技に串刺しにされ飛び散る血肉の音でも、ましてや劍聖の目論見が外れたことによるレイピアが空を切る音でもなかった

返ってきたのは二つの武器がぶつかり合うかのような金属音。

そんな音が響いたや否や、レオノーラが焦燥と驚愕の入り混じった表情を顔に浮かべながらステップで後退した。

がさがさと茂みをかき分けて出てきた奴はラピスの予想通り男だ。しかし一つだけ、とても大きな予想外があった。

「ゲ、クモの巣付いてるよ……。妖精界にも蜘蛛っているんだね。もつとメルヘンチックな世界かと思っていただけ。さて、2対16。どんな事情があるのか知らないけどさ。流石にそれは卑怯なんじゃないの？ お姉さん」

手で必死に頭に付いた蜘蛛の巣を払いながら、緊張感の無い様子でしゃべる男は、ラピスやグリフィス、レオノーラとはまるで違う雰囲気を感じている。

まるでこの世界にとっての異物であるかのように。
ラピスはその独特の雰囲気を持つ種族を知っていた。信じられないことにその男はここ、妖精の世界にいる筈のない種族、

人間だった。

朱夏の憂鬱

なんだろう、この匂いは。

埃塗れの床に、汚れることも気にせず大の字に寝転びながらそんなことを考えた。床は夏場の熱気を孕んだ空気とは打って変わって、ひんやりとしているためとても気持ちいい。

息を吸うと、部屋中から甘い、それでいてまるで歓迎できない部類の匂いが漂ってくる。

ああ、そうか。これは多分、紙の主成分であるセルロースが長い年月空気に晒され湿気を含み、酸化したことによる匂いだ。

つまり部屋の至る所に乱雑に積み上げられた古本の発する臭いである。

眼前に突き付けられた膨大な作業量を改めて確認して、俺は思わず顔を顰めながら溜息を吐いた。ここは古本屋かよ。

「なんでこんなことしているんだろう、俺」

少し首を上に向けると、窓から差し込んでくる強めの日差しとその向こうに燦然と存在する空のブルーが妙に目に染みた。

俺の名前は不破伊織^{ふわいおり}。都内の一応進学校 定義が曖昧だからねという部類の高校に一応通う 生憎とあまり成績優秀とは言い難い高校三年生だ。

付け加えると、俺っ娘というわけでもなく男子高校生だ。まあ、当然だよな。

時々こういう言動をすることがあるものの、暑さに頭をやられてるんだ、と思って優しく生温かく見守ってくれ。

今年の夏は去年と同様猛暑らしいから。脳髓が溶けてしまうのも無理はない。

俺は学業に励む傍ら、とある事務所で従業員をしていて、このセルロールの酸化したにおいが充満する部屋の中にいるのも一応仕事

の一環なのだ。

端的に言えば、今やらされていることはこの倉庫、もしくは物置部屋というべきなのか、とにかく仕事道具が散乱するこの室内の整理である。

ああ、そうだよ。要は雑用だよ。

仕事内容に不満を抱いているからだろう。イマイチやる気が出ない。数日前の仕事の疲労が抜けないのも相俟って、先程から全く手が進んでいないのだ。

「なんでアイツなんだよ……」

嫉妬心と苛立ちから、無意識のうちに口からはそんな言葉が漏れていた。

そんな言葉を発した自分自身への嫌悪感まで湧いてくる。

誰が聞いているわけでもないのに、聞いていたとして、今さら手遅れだというのに、俺は無意識的に口元を手で押さえた。

職種が職種である故に看板などという御大層なものは掲げていないが、一応この事務所の名称は『雨宮調律堂』という。

調律、と言ってもピアノをはじめとする楽器を扱ったりするわけではない。

それならば看板も掲げるし、もっと大々的に宣伝する。

そもそもピアノの調律どころか、リコーダーすらまともに吹けない俺が、そんなところで仕事をするわけもない。

大きく言ってしまうのなら、霊能力者という括りの中に入るのだろう、俺達は。

冗談でも夏の暑さに頭をやられたわけでもない。

瘴気だの、霊気だの、妖気だの、といった言葉は聞いたことぐらひはあるだろう。まあ、微妙に意味合いが異なるのだが、ここでの説明はいらないので省かせてもらう。

そもそも俺達のようなそれ専門の奴でなければ霊能力でさえ、そこら辺は十把一絡げにしまっているぐらいだ。

とにかく、そういう気はどこにでも大なり小なり存在しているものなのだ。

それについて、何もそこまで目くじらを立てる必要はない。何も有害なわけでもないし、発生して、存在して然るべきものなのだから。

だがしかし、稀にそういう気の濃度が異常に高くなっていたりするケースがある。そうするとだ。

浴びているだけでも健康状態を害する場合もある上、異類異形の物、所謂妖怪やら悪魔を呼び寄せてしまったりする。

まあ、元々そういう物　俺達、霊能力者は総じて『怪異』と呼んでいるが　は元来どこにでもいるものだ。しかしそれを普通以上に集めてしまったりするのだ。俺達人間側の観点からすれば、不吉なことが起こりやすくなる。

こうした場合に、その場所の気を浄化、つまり本来の状態に戻すのが俺達の役目なわけだ。

人はそんな俺達を『調整屋』の名で呼ぶ。

そしてそんな調整屋の一人にして、この雨宮調律堂の従業員である俺だが、今はこの雨宮調律堂の所長　つまり俺の上司に当たる兼俺の師匠である雨宮早苗さんあまみやさなえから仕事道具の整理という単純作業極まりない仕事を仰せつかったわけである。

そして当の雨宮さんとはいうと、どうも神奈川の方に大きな仕事が入ったらしく、しばらく出張に出るそうだ。かなり長くなるかもしれない、と言っていた。

おそらく長くなるのだろう。神奈川は雨宮さんにとって因縁の深い地らしいから。昔住んでいた上、今も犬猿の仲としか形容できない高校時代の先輩でもある霊能力者の知り合いがいるそうだ。

ちなみに雨宮さんはサポートとしてもう一人の弟子で、俺の妹弟子でもある弓長美矢子ゆみながみやくこを連れていった。

そして俺にはその間は依頼を引き受けることも出来ないから、倉

庫の整理をするように言い付けたのだ。

そこら辺が納得いかない。何かあまり褒められない感情が、俺の胸の内で泡立つ原因である。

確かに俺は未熟者だし、まだまだ修行中の身であるのだが、それでも弓長などよりは間違いなく上である、役に立つ自信があった。弓長など、俺なら特別な力も使わずに、何の武器も持たずに、徒手空拳だけで倒せる自信がある。

誰も連れて行かないというのならまだ分かるけど。

雨宮さんは我々の業界、つまり怪異などの特殊なものを相手取ったり、扱ったりする者達の中ではその名前はかなり響き渡っている。東京一の霊能力者となると、分野の違う実力者たちが拮抗しているので比べるのは難しいが、世田谷区一なら間違いなく雨宮さんだろう。

その元に届く依頼の中には相当レベルのものもあり、俺や弓長では足手纏いにしかない場合もあるからだ。

でも、今回は違う。なんで俺より、弓長なのだ。

雨宮さんが俺より弓長を可愛がっていることには薄々感づいていたけど、ひよっとしたら俺は信用もされていないのだろうか……。

そう思うと、少しばかり、いや　大分凹んでしまう。

旅行のお土産に自腹切ってチーズ買って帰ったりしているのにさ。雨宮さんのためなら、俺はいつだって命懸けになれるのに。それだけの恩義があるから。

そんな風に考えた時だった。

この洋館の呼び鈴が鳴る。すなわち来客だ。ここは基本的に事務所としか使用していないから、おそらく依頼者なのだろう。

内にある憂鬱が如実に表れた重い足取りで、俺は玄関の方へと向かった。

呼び鈴を鳴らしたのは、二十代前半ぐらいと思われる綺麗な外国人女性だった。予想通りここに依頼をしに来たらしい。

これぐらいの年齢の依頼客というのは、ここでは左程珍しいわけでもないのだが、高校三年生の俺としては少々緊張してしまう。

ただでさえ年上だというのに、こんな綺麗な人だからな。さらに外国人だ。

俺はちらりと、書類に名前や住所などを記入している女性の顔を盗み見る。書くことに意識を向けている女性がその視線に気付く様子はない。

陽光のような金髪と、深い色味の青をした瞳は強力な引力を持つて俺の視線を引き付ける。

紙や目の色からしてヨーロッパ系の人のように見えるけど、果たして英語圏の人なのだろうか。

一応職業柄というか、学校のテストの方はともかく英語はそれなりに喋れる。だがそれ以外はからつきしなのだ。

しかしそんな俺の心配は完全に杞憂でしかなかった。

書類を書き終え、それをこちらに差し出した女性は日本語で話したのだ。書類もほとんど日本語で記入されている。

「私はエマ・オレイリ」と申します。スペルはそちらに書いてある通りです」

そう言い終えると同時に、オレイリさんは綺麗な動作で低頭した。

Emma Reilly、と丁寧に綴られたな文字列が書面の上に並んでいる。

「オレイリ、というとアイルランドの方ですかね？」

「ええ、その通りです。詳しいですね」

オレイリさんは感心したように口の端に僅かな微笑を浮かべた。例外なく、全ての物腰に品格のある人だ。

幾らなんでもわざわざアイルランドからやって来たとも思えないし、日本在住なのだろうか。

名前の下には生年月日が記入されている。年齢は二十三歳か。少し意外だった。

容姿だけなら相応の年齢だと思うのだが、所作や纏っている雰囲気がとても洗練されていて、俺や学校の同級生があと五年でこうなれるとは、到底思えなかった。

それにしてもこの人の、大人びているだけでなく、どこか謎めいた雰囲気は誰かに似ているような気がする。誰だろう。出てこないな。

「それでオレイリさん、依頼の方というのは？」

いつもなら雨宮さんが不在の場合は、先程の書類だけ書いて帰ってもらい、後日連絡という形を取っているのだが、なんとなく今日の俺は雨宮さんの命令に逆らいたい気分だった。

依頼内容を先に聞いてやるどころか、あわよくば俺一人で解決してしまおうというぐらいの気持ちである。勿論難しいようであれば、そんな真似は控える。これぐらいの反抗は許して欲しい。

「もうお気付きかも知れませんが、私はあなた方と同じような職業、魔術師です」

「でしうね」

俺は表情一つ変えずに、相槌を打った。しかしその実、かなり驚いていた。まさかこちら側の人間だったとは。

おそらく雰囲気は誰かと似ているというのは、雨宮さんのそれと似ていたのだろう。

調整屋や魔術師などの、こちら側の人間が纏っている特有の空気という物があるのだ。

生憎、若輩者であるため、俺なんかからは微塵も感じられないそうだが。

「私の友人夫婦の知り合いの話なのですが、どうやらその二人の子供がスプリガンの仕業で取り替え子に遭ってしまったようなのです」

「取り替え子……」

俺はぼそりとその単語をオウム返しする。

その瞬間、カーテンの傍にあるこの洋風な邸宅とは不釣り合いな風鈴が、リンと鳴いた。

取り替え子というのは、確かヨーロッパの方の伝承だっただろうか。

エルフやフェアリーなどの妖精が自らの子供と人間の子供を取り替えてしまう、という伝承だ。

理由としては人間の子供を可愛がりたいとか、逆に召使いにしたとか、ただ単純に悪戯心からのものだったりするらしい。

あとは人間の子供の方が強いから、という解釈をする人もいるが、それはどうなんだろうな。体の小さいピクシーとかならともかく大抵の妖精は人間より強い気がする。

そういえばオレイリ さんの故郷でもあるアイルランドにも、取り替え子の伝承があったな。

「私の知り合いのその夫婦、カーリー・マーフィーとニコライ・マーフィーと言うのですが、彼女等も魔術師なのです。そしてどうやら取り替え子に気付いたら、誰にも告げず直ぐに妖精界へ向ってしまったようで。もう二週間も帰ってきていないんです」

「二週間……」

俺は思わずそう呟いていた。それは確かに心配だよな。なんかあったのでは、と思ってしまうのも止む無しだろう。

「そこで私はその友人夫婦とその子供をあなたに助けていただきましたいのです。一応成功報酬として、日本円で三百万円ほど用意させていただきますました」

そう言っただけでオレイリ さんはテーブルの上に札束を三つ乗せる。

見たこともない量の福沢諭吉、俺は閉口する。

先程も言っただようにこの調整屋は、場の空気を整えるのが仕事だ。つまりこういうのは見事なまでに専門外であった。

雨宮さんは簡単な依頼でも、専門外のことを引き受けるのは渋る。そこら辺のそれを専門としている人より余程上手くやれるのに、だから雨宮さんの教えに従うのなら、ここはお帰りいただくべき

なのだろう。よし、

「お引き受けいたします」

どうせもう雨宮さんの言いつけは破りまくっているんだ。今さらどうってことないさ。

それに成功させれば、流石の雨宮さんも俺のことを少しは見直してくれるだろう。

妖精相手ならそんな難しい仕事にもならない筈だ。過去に妖精と戦ったことがある経験から俺はそう判断する。正直余裕だった。

それでも戦闘は気の調整の次に得意分野だ。

「まさか引き受けてくださるとは。本当にありがとうございます」
そう言つてオレイリさんは再び頭を下げた。

「では、成功したときのみ三百万お支払いいただくということでは」

「え？ オレイリさんが妖精界まで送つて下さるのですか？」

一通り準備を整えた俺は、オレイリさんのその提案に思わず驚きの声を上げる。

「ええ。それでも空間魔法は得意なんです。アイルランドの森の中に妖精かとの入口を知っているので、この事務所とそこを繋げます。そうすればここからでもすぐに妖精界へ行けるでしょう」

そういえばアイルランドには妖精界への入り口が沢山あると聞いたことがあるな。だからアイルランドには妖精の伝承が多く残されているとか。

「なるほど。それはいいですね。ではぜひお願いします」

「はい。私としても早く三人を助けていたきたいですから。本当なら私も妖精界に行きたいところなのですが、私はフェアリーや低級動物霊の一つも倒せないのです」

それは確かに一緒に来られても足手纏いだ。

「まあ、人には得手不得手という物がありますから」

俺は苦笑いしながら、慰めるように言った。オレイリさんの場合は空間魔法が得意ということなのだろう。実際、日本からアイル

ランドまでを繋げるなんて、生半可な技量じゃ不可能だ。

数十分後、街の人気の無いところやってきた俺の足元には青い魔方陣がある。それが光り輝いて、今まさに転送の準備を終えようとしていた。

先程、オレイリさんから手鏡のようなものをもらった。二つで一組の代物で、もう片方を手にしている人間と、例え異世界だろうと通信できるらしい。

どうしても戻らなければいけなくなった場合や、三人、マーフイ一家を見つけた場合はこれで連絡して欲しいとのことだ。

「それでは難しい依頼だとは思いますが、高名なあなたならきっと成し遂げてくれると信じております、雨宮早苗さん。トランスミット！」

オレイリさんは呪文を唱えたが、俺にとってはそれどころじゃなかった。

難しい依頼？ 高名？ 雨宮早苗さん？ 俺の頭の中にはオレイリさんの放つたいくつかの言葉が凄まじい速度で、俺の脳内にてリフレインする。

もしかして俺を雨宮さんと勘違いしている？ そう言えば名乗っていないかったな。

オレイリさんは雨宮さんの噂を聞いて、わざわざアイルランドから日本までやってきたのか？

つまりそれだけの難しい依頼だつてことなのか？

俺なんかには不可能な依頼なのか？

何か言わなければと思ったのだが、その瞬間には視界は全て青白い光で覆い尽くされる。転送だ。

予想通り、俺はこの先難行苦行の嵐に巻き込まれることになるのだが、それは罰なのかもしれない。

俺がオレイリさんの依頼を受けたのは、決してオレイリさん

を、そしてその友人であるマーフィー一家の三人を助けたいなどという殊勝な思いではない。

報酬のためというビジネスライクな思いにさえなれていなかった。雨宮さんに認められたいという功名心と、弓長への嫉妬と、あとオレイリさんが綺麗だったからかな。暑さに頭をやられて判断能力が欠如していたのかもしれない。

とにかくそういう中途半端な思いだったから、雨宮さんの言い分けを守らなかったから、俺には罰が当たったんだと思う。

騎士団長

俺が転送されたのは、人間界ではそう滅多にないだろうと思えるほど、緑が豊かな森の中だった。しかし地面の上というわけではなく、上空数メートルほどに地面と平行な体勢で飛ばされたため、落下した折、右の肩を思いっきり地面に打ち付けてしまう。肩が外れそうだった。

痛みのおかげで顔に苦痛を浮かべながら、俺は直ぐそばの木に寄り掛かる。

やれやれせめて地面に足が着くように転送してくれればいいのに。まあ、文句を言える立場でないのは重々承知だけども。

そう思いつつ、俺はバッグの中から連絡に用いる手鏡を取り出す。幸い今の落下で割れている、なんて不幸極まりないことはないようだ。

そんな時だった。まるで言い争っているかのような陰のある幾つかの声が、俺の耳に飛び込んできた。

声の方に目をやると、数百メートル先で十数人ぐらいの人間、いや恐らく妖精が集まっている。

近寄ってみると、どうも二つの勢力に分かれているようだ。

片方は青い瞳と青い髪という幻想的な容姿をしている美少女。と、浅黒い土色の肌に金髪の少年、こちらも中々爽やかそうな好青年だ。女の方は、全体的に青いし、ウィンディーネか？ 男の方はなんだろうな。妖精にはあまり明るくないため判断がつかない。名前さえ聞けば少しは分かるのだけだな。外見の年齢は二人とも俺と同じ程度。実年齢については妖精の年の取り方が分からないので、何とも言えない。

もう片方の勢力は合計で……十六人か。潜んでいる奴もいるかもしれないけど、とりあえず視認できる所には十六人。比率にして前述の陣営の八倍だ。

細部は違うものの、全員が全員、似たようなデザインの黒い甲冑を纏っていた。

容姿は黒い髪に金色の瞳。インプ？ ブラックドッグじゃないよな。俺は黒や闇から連想できる妖精を頭の中で検索するものの、イマイチピンとこない。

その中でも先頭に立っている一人の女性騎士に、俺の目がいく。あれは相当の手誰だな。動きに一切の無駄がなく、皮膚を泡立たせるような威圧感を全身から放出している。

ここは巻き込まれないように逃げた方が良さだろう。一刻も早く、オレイリ さんに連絡して俺が雨宮さんではないということ伝え、謝罪しなければ。

でもこの雰囲気は確実に一人や二人は死者が出るよな。ってなに考えてんだ。

大体妖精が何人死のうと俺には関係ない。どちらにも手助けしてやるような義理はないんだ。

でも多分、お互いの仲裁に入るぐらいなら俺にでも出来る筈なんじゃないのか。オレイリ さんに連絡するのは、もう少し後でもいいんじゃないのか。

助けようと思えば、助けられる命を見す見殺しにするのは、暴力と同じだ。

そう思った時には、すでに俺は腰元の短刀を手に取っていた。やれやれ。自分の自制心の無さにはほとほと呆れる。

やってしまった。どうしようかと思っていたら、今にも一触即発の雰囲気だったので、とりあえず人数の多い黒い方の戦力を削いでみたのだが、リーダーを見受けられる女性騎士は俺に対して、ひどく怒りを露わにしている。当然だけど。

とりあえず未だ暴れまわっている炎の獅子を消した。このままでは止めに入った俺自身が死者を出してしまうところだぜ。

どうも大気中の魔力の濃度が濃いのか、想像をはるかに超える威

力が出てしまったのだ。人間界では、この二分の一の威力も確実に出ない。

「貴様、人間か」

黒い女性騎士は俺を睨みつけながらそう問い質した。八割方確信を持っていたようだ。俺は首を縦に振ることによって肯定する。

「なんのつもりだ？」

再び女性騎士は問う。剣呑な雰囲気。

「なんのつもりだって。さっき言っただろ。その人数差で仕掛けるのは卑怯だって」

本当に大した理由はないのだ。強いて言うなら、罪悪感を刺激されたというか。そんな感じだ。両陣営ともに、姿が人間に近かったというのも原因だな。

「だから、何のつもりだと聞いているんだ。この私に逆らってたで済むと思うなよ」

そう言って、女性騎士は勢いよくレイピアを突き出した。とても当たるような距離ではなかったが、俺はなんとなく嫌な予感がして横に避ける。

すると先程まで俺の後にあった木に、半径十センチ程の大きな穴が空いた。妖精の魔法だろうか。

「ところでお姉さん達は一体何の種族なのさ。こっちだって答えたんだ。教えてくれてもいいだろ」

俺は先程投げた短刀と対になっているもう一つの短刀で、女性騎士の華麗な剣撃に応戦しながら尋ねた。

別に俺は短刀使いというわけでもないの、無理はないかもしれないが、明らかに押されていた。

分かってはいたが、どうやら威厳のある態度ははったりというわけではなく、相当の剣術家だ。一つ一つの技の型がとても洗練されていて、それでいて華奢な外見に似合わず脅威の剣速である。

「いいだろう。教えてやる。我等はスプリガン。そして私はスプリガン王国騎士団長レオノーラ・ハインフェルトだ！」

スプリガン。確かオレイリさんの友人の子供を攫ったのも、スプリガンだという話だった。もしかしたらこいつから何か話を聞けるのではないだろうか。いや、そんなことはどうでもいい。俺はもう依頼からは手を引こうと……。

「隙だらけだぞ」

死刑宣告かのようなその声とともにレオノーラと名乗ったスプリガンは、雑念を抱き集中しきれていない俺の持つ短刀の柄の部分をついた。その衝撃に短刀は空中に投げ出され、茂みの中に入ってしまった。まずい。

戦闘中に敵の動きに集中できなくなるほど、別のことに気を取られてしまうとは、どれだけ愚かなのだろうか、俺は。

「少しは出来るようだが、ここまでだな」

その時だった。俺の耳に先程の青いと思しき少女の声が聞こえてくる。

「人間、受け取れ」

声の方向を見ると、少女は先程俺が投げた短刀をこちらに投げた。俺はそれをキャッチして、間一髪のところではレオノーラの斬撃を受け止めた。

青い少女は相棒らしき少年とともに、残っているスプリガン三名の元へと走っていく。

少女は細身の長剣を、少年は優に身長半分ほどはある斧をそれぞれ相手の防御の間を突くように振り回し、一撃で膝を突かせた。

いかにも術士然とした奴らだったが、それでも一撃で倒してしまふとはあの二人も意外とやるのかもしれない。

一方で、俺と対峙するレオノーラのレイピアを紫色のオーラのよなものが包む。

「斬り碎け、ドラコ・ブラキウム！」

その凜とした声で空気を振動させると同時に、禍々しい様子のレイピアを一閃した。俺は軌道を予測し、慌てて横つとびする。するとレオノーラの前方に幾つもの切創が発生し、木々はバラバラに、

地面は鋭利な何かに挟り取られた。斬撃の軌道はまるで蜘蛛の巣のようだ。俺は間一髪のところまで回避に成功する。魔術で強化した体を使って、5メートルは飛んだ筈なのにギリギリかよ。

俺はすぐさま立ち上がると、もう一人のスプリガンの元へと走る。槍と盾という正に歩兵と言った感じの装備だ。

スプリガンの騎士は槍で俺の心臓の辺りを突いてくる。俺はそれを右の脇に通すような形で避けると、一気に懐へと侵入し、短刀を敵の首筋目掛けて突き出さんとした。それに対してスプリガンの騎士は、俺の刺突に合わせるように盾を左に傾ける。それは中々の反応速度で、このまま突いても刺突は盾に阻まれてしまうだろう。

だがそれは予想していた。俺は短刀を手の中で反転させると、その左腕を絞める。顎に手を当てる感じた。そして右腕をスプリガンの騎士の横つつら目掛けて思いつきり加速させた。鈍い音ともに、頬に俺の渾身の一撃が突き刺さる。

相手が身体をくの字に折り曲げて吹っ飛んだのを確認すると、俺はレオノーラに見せつけるように、両手を広げて降参の意思を見せた。レオノーラは眉をひそめ、怪訝そうな顔をしている。

「今度は何のつもりだ」

「多分あなたが想像している通りですよ。降参するということです。もちろんあなたの方にも降参してもらいますがね」

「ふざけるなよ。これだけのことを起こしておいて、そのようなことが許されると思っているのか」

レオノーラは酷く憤慨した様子を見せた。

「あなたの方にも悪い提案というわけじゃないと思うんですがね。確かにあなたなら一人でも俺達三人ぐらい倒してしまうのかもしれませんが。でも俺達は最後の抵抗で確実にあなたの仲間を何人か道連れにしてみせますよ。少なくとも三人以上は、ね。ここは引くのが得策だと思いますが、騎士団長レオノーラ・ハインフェルトさん？」

数瞬後、レオノーラは舌打ちをした。それは渋々ながらも了承するというサイン。どうやら何とかなったようだ。

「あなたは何者なのですか？」

青い少女が俺をじろじろと見ながらそう言った。まあ、確かに衣服からしてこの世界っぽくないかもしれない。

それにレオノーラが俺のことを人間だと見抜いていたようだしな。妖精にはそういうことが分かるのかもな

それにしてもこいつらの言葉、妖精言語とでも言うべきなのだろうが、日本語ではないのは分かるのだが、意味が分かるように翻訳されて耳に入ってくる。意思疎通の点で問題はないようだ。

「まあ、分かっているとは思うけど人間だよ。名前は不破伊織。さあ、次はそっちの番だぜ」

「えっと、俺の名前はグリフィス・バレッジ。見て分かると思うけど、土の妖精ノームだ」

ノーム、グリフィスは自分を指差してそう言った。初対面で、それも人間の俺に対して全く物怖じせず碎けた調子で話しかけてくる。「いや全然見て分からないけど」

「ええー」

グリフィスはがっかりしたような顔だ。

「だって、ノームって老人の姿してるんじゃないのか？」

「あはは、種族全部が老人なんて有り得ないだろ。たまたま人間が見たノームが老人で、そのイメージが定着しただけさ」

「そっちは？」

俺は先程からずっと難しい顔をしている青い少女の方に質問した。「私はラピス・カーネリアンと申します。サラマンダーの国の軍部に所属しております」

「サラマンダー。君はサラマンダーなの？」

青いのに。でも今思えば、鎧だけは赤を基調としている。赤がサラマンダーの色かは分からないが、もし違うとするのならどちらにせよ色だけで種族を判断する要因にはならないか。

「いえ、種族はサラマンダーではありません。サラマンダーの国に

暮らし、その国を治めし女王に仕えてはありますが、厳密に言うのなら種族はウィンディーネです」

「どうやら俺の予想は一応当たっていたらしい。」

「でも、なんでウィンディーネの君がサラマンダーの国の騎士なんだい？」

俺は些細な疑問を解消するために何気ない調子で尋ねたのだが、それを遮るようにグリフィスが呼び掛けてきたため、中断することとなる。何だか、聞いてはまずい話なのだろうか。

「もし良かったら何か礼をさせてくれ。不破伊織さん」

「伊織でいいよ」

「ああ、そうだな。じゃあ人間界への帰り方とかがって分かるかな」
ラピスとグリフィスは顔を見合わせる。

オレイリ　さんに連絡を取ったら、速攻で帰らないといけないかな。今のうちに帰り方を確保しておこう。

どうもオレイリ　さんの見立てでは、来る時に使ったあそこの出入り口はもう塞がっていて、三日間は使えないらしい。

「残念ながら、私達は存じ上げません。ただ王都にいるノイシユタレンさんという研究者なら知ってるかもですが」

「その人に会わせてもらってもいいかな」

二人は俺に聞こえないよう、小声で相談を始めた。何を話しているんだろう。気になるなあ。まあ、聞こうと思えば聞けないこともないのだけど、やめておこう。信用されるためには信用しないとね。相談事は終了し、俺はこの二人と一緒に、サラマンダーの国の首都に向かうこととなった。

深層なる軋轢

どうやら夏なのは妖精界でも同じらしく、空は清々しいほどの晴れ空で、歩いていると次第に額から汗が噴き出してくる。日本の夏のようにジメジメとしていないのが不幸中の幸いだろうか。

聞くところによると、妖精界というのは我々の住む世界と同座標にして別の場所、つまり俺達の世界の裏側らしい。どちらが裏かというのは視点の問題だけだ。

ということは南半球に行けばそれなりに涼しいのかもしれないな。いや、逆に寒いかな。

服装は変えずに来たから、極寒の地に飛ばされるとかよりはこの方がまだマシである。

上空を風が切る音がしたので見上げてみたら、六枚ぐらい羽のある鳥と、小さい人型の何か（ピクシーと推察）がまるでレースでもしているかのように凄い速度で、並んで飛行していた。

改めて辺りを見回してみると、遅まきながらこの妖精界というのはやっぱり異世界なんだなあ、と思い知らされる。

とんでもなく大きな、人すら呑み込んでしまいそうな食虫植物とか。最早『食虫』じゃないですね。

あと緑色の哺乳類とかさ。まあ、こんな生い茂った森で生活するには哺乳類であろうとも緑色にならなければいけないのかも知れないが。

とにかく生態系は妖精も含めて無茶苦茶だ。どうも慣れない。

サラマンダーの国の王都までは一時間ほど歩くそう。結構近い。少しばかり妖精について探ってみるかな。前で揺れる青いロングヘアと尖りを帯びた両耳を見ながら、そんなことを考えた。

「なあ、君たちはノームと、……サラマンダーなんだろう。ということは、どうも、異種族だから必ずしも対立があるという風には見えないが、先程のスプリガン達とはなんであんな陰悪だったんだ？」

矢張りスプリガンのことは依頼の件もあつて気になる。手を引くつもりだけど、一応。

それに自分から巻き込まれに行つたとはいえ、俺も戦つたのだ。それぐらい聞く権利があるだろう。

そんな感情が籠つた目で見ると、それが伝わつたのかラピスが溜息を吐きつつ、口を開いた。

「本当ならこういうことを第三者、それも異世界から来た部外者に話すのは気が進まないのですけどね。命の恩人の質問を無碍にするのも失礼ですからお答えします」

どうもこのラピスという女。敬語を始めとする丁寧な態度の中にも、敵意のようなものが含まれている気がする。

俺が人間だからか？　そういえばレオノーラとかいう女も、俺が人間だということに何かしら思うところがある感じだったな。

グリフィスはなんとも思っていないみたいだが。さっきなど能天気な顔をして、人間界の様子について俺に尋ねてきたぐらいだ。

人間と契約している妖精というのも多々いるぐらいだし、怪異の中では比較的人間と上手くやっている種族だと思つていたんだけどな。

だからこそ大丈夫だろうと、相手にしなければいけないのはせいぜい子供を攫つたスプリガンだけだろうと思つて依頼を引き受けたのだが。どうも目論見が外れたか？

理由は気になるけど、流石に本人達にそれを聞くわけにもいかないよな。

まあ、とりあえずスプリガンとの対立の理由について聞かせてもらおう。俺は続きを促した。

「こんな風に対立することになったのは、スプリガン王国を今の王、ゼノンファレスが収め始めた頃からです」

当然、聞いたことがない名だ。自らの世界の主要国の首脳をしっかりと記憶しているかすら怪しい俺が、異世界の国の王様だなんてわかる筈もない。

「ゼノンファレスは領土を広げようと周辺諸国に次々と侵略を仕掛けています。スプリガンの国と、同盟を結んでいるインプの国との前に、すでにウィンディーネとフェアリー、ブラックドックの国が支配下に置かれています」

ラピスはさも平坦な調子でウィンディーネ、と発音した。幾らなんでも全く関係がないということはないと俺は考えているのだが、何か思うところはないのだろうか。

「なるほど野心家ってわけだ」

三国志で言ったら曹操みたいなものなのだろうか。俺は三国志については詳しくないから完全にイメージの話なのだが。そういえば兩宮さんはそっちの方面にも明るかったな。

「ええ。そもそも時代錯誤なのですよ。侵略だなんて」

どうやら妖精界でも戦争して敵国を侵略するというのは今時じゃないらしい。

「ゼノンファレスは周辺諸国を一通り侵略した暁には、妖精王と名高いオーベロンが収めるエルフの国へ攻撃を仕掛けるって噂もあるぐらいです」

オーベロンの名前ぐらいは俺も聞いたことがある。

こちらの方が近道だと言われて、俺は鬱蒼と生い茂る草木を掻き分けながら進む。

「ふーん、なんかよくわからないけど、ノームとサラマンダーはスプリガン、及びインプに対抗するために同盟を結んでいると考えてオーケーなのかな？」

「そうです。まあ、他にもいくつかの国も同盟に入っていますがね」

そんなことを話している内に、城門が見えてきた。あれがサラマンダーの国の王都なのだろうか。立派な城壁に周囲を囲まれている。傍には赤い甲冑の妖精が何人かいる。

すると突然、ラピスがぴたりとその場で停止した。俺とグリフィスもそれに合わせるように歩みを止める。

「今から私達は將軍のところ任務の報告に行くけれど、くれぐれも失礼な行動はしないようにお気を付け下さい。というか勝手に話さないでください」

「なんで？」

俺が首を傾げながらした質問には、隣にいるグリフィスが答えてくれた。

「粗相をして首を跳ね飛ばされでもしないためにだよ。俺なんか同盟を期に関わることになって結構経つけど、まだ慣れないぜ」

「な！？ そんなおっかない人なのかよ。だったら、出来れば俺はその報告が終わるまで一人で待ってたいなあ、なんて思うんだけど」腑抜けたことを言う。將軍。もしあのレオノーラと同じクラスの実力者だしたら本気で俺の命が危ない。

「あのですね。あなた一人で歩かせたら、それこそ命が幾つあっても足りませんよ。人間……なんですから。私達だってあなたが恩人でなかったこんな場所まで連れて来ません」

ラピスは今までよりもさらに冷淡な声でそう言った。お調子者と見受けられるグリフィスでさえ今はどこか神妙な表情を作っている。ようやく分かった。

ラピスの慇懃な態度はこちらに嫌悪感を抱いている中でも、命の恩人に対して最低限の礼節をわきまえようなどという、殊勝なものではない。

敵意を隠すためのカモフラージュですらない。

壁なのだ。

俺という人間を自分の心に踏み込ませないための、硬く厚い壁なのだ。

拝啓、親愛なる俺の師、雨宮早苗先生。今までの経緯から多少の確執は予想していたのですが、人間と妖精の間にある溝は想像以上に深そうです。

王女殿下

王都の名称はフレアブルクというらしい。

矢張り町、そしてこの城でも、周囲の妖精から随分と奇異を含んだ視線を向けられた。一種の怯えのような視線も入り混じっていたように思う。活気のある街らしく、実際、俺の姿を見るまでは皆力ラカラと声を上げて、楽しそうな笑顔を浮かべていた。

ああいう風に不吉なものを見る目を向けられるのは、正直辛い。

ラピスは二人の兵士が挟むようにして脇に立っている黒い木製の扉を二回ノックする。乾いた音がした。

「サラマンダー王国軍所属ラピス・カーネリアン。及びノーム王国騎士団所属グリフィス・バレッジ。ただいま戻りました」

その言葉に対して、入れ、と返してきた声は筋骨隆々の男を思わせる雷のような重低音。

先陣をラピスが切り、それにグリフィス、俺の順番で続く。

ラピス達から聞いた話ではここは將軍の仕事部屋だという。うちは雨宮さんが経営に関しても一日の長があるため、かなり儲けているのだが、そのオフィスより相当良い部屋だ。だが、將軍は戦場で自ら指揮を取ったり剣を振るったりすることの方が多いから、使用頻度としてはそれ程高くないという。もったいない。

本棚に並ぶ見たこともない文字が背表紙に書かれた書籍群と、壁に立てかけてある剣が目についた。あの剣は奇襲にでも備えているのだろうか。

そして奥には紙の束を捲りながらペンを動かしている妖精がいた。まさに声の印象通りといった感じの屈強そうな、それでいて気難しい雰囲気も併せ持つ男性の妖精である。外見は人間でいうのなら三十代ぐらいだろうか。

短めに刈り上げられた、燃えるような赤毛。服の上からでも筋肉が分かる上、腕の太さは俺の二、三倍はあるんじゃないのかという

鍛え抜かれた肉体。そしてこれまたギラギラと燃える炎のような鋭い目。

やべーよ。滅茶苦茶怖いじゃないか。武器なしでも俺なんか瞬殺できそうだよ。すでに恐怖で足がガタガタと震えていた。

しかしスプリガンの騎士団長の次は、サラマンダーの將軍様とはな。

僕は妖精界に来てから数時間程度で、立て続けに凄い人に会っているのではないだろうか。

將軍とラピス。グリフィスが話しているのをボーっと、眺めながらそんなことを考えていた。

どうやらラピスとグリフィスは何らかの任務に失敗したらしく、將軍は顔に髪の色素が下りてきたかのような様子で二人を怒鳴りつける。

その声量はまるで雷でも落ちたかのような轟音だった。耳が痛くなってくる。

そこで赤毛の將軍はようやく俺のことを認識してくれたのか、ん？ と声をあげてこちらに向けていぶかしむような視線を送ってきた。

俺はその射抜くような眼光にどう対応したらいいか分からず、とりあえず愛想笑いしてみる。

「どうして人間がここにいる」

將軍は相変わらぬ低い声と鋭い目付きそう呟いた。ずっとこんな感じの顔をしているため判断がつかないが、内心ではとても不愉快に思っているのかもしれない。

「將軍、彼が先程言ったスプリガンの追手から私達を助けてくれた人なのです。確かにまごうことなき人間ですが、悪い者ではないかと……」

「馬鹿者が、それこそ我等に取り入るための戦略かもしれないだろう。いや、そもそもスプリガンやインプの連中と繋がっていないとは言いい切れない。お前達を助けたのも自作自演と言う可能性がある」

將軍は凄い勢いでラピスを捲し立てる。

スプリガンやインプと繋がっているなんてことは断じてないが、お礼に帰る方法を教えてくれと要求している時点で、全く打算的な思いが無かったとは言えないか。

「我等は国民を守ることが仕事だ。その我等が自ら国民を危険にさらすような真似をしてどうする。この前も変身したスプリガンに女王陛下を暗殺されそうになったのをもう忘れたか。バレッジ、お前も他国の者とはいえ容赦はしない。それなりの処罰は受けてもらうぞ」

人間は対立しているスプリガンと同等か、それ以上に嫌われているんだな。何だかやるせない気持ちだ。

「あの、すみません」

俺は放っておけば、何時までも怒鳴っていてしまいそうな將軍にそう声をかけた。

將軍は俺の突然の発言に、怪訝そうに眉をひそめる。この人、俺の存在を忘却の彼方にやっていなかったか？

「俺のことが信用できないというのは分かります。実際、武器だつて所持していますしね。何なら今すぐこの国を出て行きますし、それでも納得がいかなければ牢獄にでもぶち込んで構いません」
將軍は俺の意外な潔さに面喰っていたようだ。尤もだ。俺自身、自分がこんなことを言っただけということに驚いているのだから。

ただラピスやグリフィスがあんな風に言われているのが、見ていられなかったのだ。

だって俺はあの二人があれだけの数のスプリガンに囲まれながら、最後まで諦めず仲間の役に立とうとしたのを知っているから。

何とか投獄前にオレイリさんに連絡できればな。

「ちよつと何言ってるのよ。勝手なことは話さないで、とあれほど言っただじゃない」

ラピスが敬語も忘れて凄いい剣幕で俺に怒鳴りつけてくる。

「もういいよ。ありがとう。感謝してるよ。人間のこと凄く嫌いな

のに、ここまでしてくれてさ。その気持ちで十分だ」

「だから勝手なことと言わないでっつて、言っているじゃない！」

ラピスがそう怒鳴った時だった。突然部屋のドアが開いて、のんびりとした口調で鳥のさえずりのように澄んだ声が響く。

「皆さん、騒がしいですよ。部屋の前まで聞こえてきています」

振り向いた方には、絹のようにつややかな赤い長髪を揺らし、同じ色の豪華なドレスを纏った気品溢れる女性がいた。

「り、リフィル王女殿下……」

その震えを帯びた声は一体誰の声だったのだろうか。あまりに唐突な登場に、事情を知らない俺としてはそれどころではなかったのだ、判別することが出来なかった。

そしてその声により俺はさらに困惑する。確かにただものではない雰囲気漂う女性であるが、まさか王族とは。先程女王と言っていたから、女性にも王位継承権があるのだろう。つまりこの女性は真正銘この国のトップ候補ということだ。

外見年齢は俺より少し上、二十歳前後ぐらいに見える。

「王女殿下。部屋の外を無闇にうろつかれては困りますぞ」

慌てたように將軍が言った。そう言えばさつき変身したスプリガンに女王が暗殺されかかったと言っていたな。心配するのも当然か。

「大丈夫ですよ。近衛騎士のガーフィールドさんとプロアさんに付いてきてもらいましたから」

リフィル王女はそう言うものの、將軍はまだ不安そうな顔をしている。実際その近衛騎士の二人も同じ思いだろうからな。

炎を思わせるバーチェスさんの赤よりさらに彩度の高い赤い髪をなびかせながら、こちらへ柔和な笑みのリフィル王女が歩み寄る。

「そんなことより何の騒ぎですか、バーチェス將軍？ あなたが怒っている、部下の者が不安がりますよ」

將軍 バーチェスというらしい は先程までの態度とは百八十度違う、しかつめらしい態度で答えた。

「はっ、その怪しい人間を捕らえようとしていたところです」
怪しい、って言うのもまた否定できないな。俺は心中で苦笑いする。

「バーチェス將軍、何度も言うようにこの人間は私とバレッジの命を救ってくれました」

ラピスはバーチェス將軍に喰ってかかった。こんなことをして大丈夫なのだろうか。あとで遺恨が残ってしまうのではないだろうか。不安だった。

「あら。ラピス、それはどういうことなのかしら」

リフィル王女はどこか親しげな様子で、ラピスに問い掛ける。

「はい。十数人のスプリガンに囲まれたところをこの方に何とかしていただいたのです」

「十数……。ご無礼を承知で言わせてもらいます、そうは見えないのだけど、お強いのですねえ」

リフィル王女はのんびりとした口調で感心したように言った。

「いえ偶然ですよ。不意打ちや、人質紛いの卑怯な手も使いましたし」

今思うと、完全に小物の匂いのする戦い方だったぜ。

「それでもあなたは私の仲間を二人救ってくれました。ありがとうございます」

そう言ってリフィル王女は深々と首を垂れる。

幾らなんでも一国の王にそんな簡単に頭を下げさせるわけにもいかないの、直ぐに頭を上げてください、と言った。

三回ほど言った辺りでようやく頭を上げてくれたリフィル王女は、赤い羽根飾りのついた扇のようなものでバーチェス將軍の方を指して口を開く。

「バーチェス將軍、最近このような情勢ですから神経質になるのも分かります。しかし、私達サランダーは善なる火を燃え上がらせ、悪なる火を消しさる正義！ 將軍のあなたが疑心暗鬼になって恩人に素直に礼も言えないようではどうしますか」

それは今まで通りのんびりとした口調で、優しい声音だったが、その中に流石一国の頂点に立つ人間だと思いきらされる威風堂々としたものがあつた。

しかしそれでもまたバーチェス將軍は納得していないようだ。

「しかし……確証が持てません。その少年が私達に危害を加えないという確証が」

「頑固な人ですね。もう少し楽に生きればよろしいのに」

リフィル王女が不満そうに頬を膨らませる。なんか可愛い。

「ねえ、人間さん。私達に危害を加えるつもりなんて無いわよね？」

「はい」

俺はリフィル王女の緋色の瞳にしっかりと視線を合わせて、間髪いれずに答えた。

「本当よ」

そう言つてリフィル王女はバーチェス將軍に微笑む。

「むう、貴女がそういうのなら、そうなのでしょうね」

やけにあつさり折れるな。あれだけ俺のことを信用できないと言つてたのに。

立場的なことも無論あるだろうが、もしかするとリフィル王女は隠しごとに対して絶対的な何かを持っているのかもしれないな。

「人間殿、」「不破伊織です」

「不破伊織殿、すまなかつた。先程までの非礼を詫びる。王女殿下の言う通り、少々神経質になつていたようだ。もしよろしければ、客人として持て成させてくれ」

バーチェスさんが頭を下げるので、俺はまたも頭を上げてくださいとお願ひする羽目になる。

「お気持ち嬉しいのですが、どうものんびりもしてられないので。人間界へ帰る方法を知っているという、ノイシュターレンさんという方に会わせていただけないでしょうか？」

バーチェス將軍の信じられないというような顔が少しだけ気になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4030u/>

グッド・ネイバース 妖精物語

2011年8月7日03時22分発行